

【専門科目】（教科教育専攻・国語教育コース）  
（平成30年度入試の問題）

次の事項に注意して解答しなさい。

国語教育コースの専門科目試験問題は、以下の2種から構成されています。

I 教科教育に関する問題

II 教科専門に関する問題

I・IIともに解答しなさい。

専門科目（I 教科教育に関する問題）

一、次の①から⑤の中から三つを選び、簡潔に説明しなさい。なお、選んだ項目の記号を（ ）内に書き入れて解答すること。

①言語環境    ②大村はま    ③リテラシー    ④読解指導と読書指導    ⑤コンポジション理論

（ ）

（ ）

（ ）

二、次期学習指導要領で強調されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するような国語科の単元を一つ構想し、その目標、内容、方法を示しなさい。

単元名

目標

内容（教材、話題・題材など）

方法（具体的な学習活動など）

専門科目（Ⅱ教科専門に関する問題）

第一問（日本文学領域）

（一）次の文章を読んで、後の問に答えよ。

天曆の御時、月次つきなみの御屏風の歌に、擣衣きぬたの所に兼盛かねもり詠みていはく、

秋深き雲井の雁の声すなり衣うつべきときやきぬらん

紀時文ときふみ、件の色紙形を書く時、筆をおさへていはく、「衣うつを見て、うつべき時やきぬらんと詠ずる、如何いかん」。兼盛にやがてたづねらるるところに、申していはく、「貫之が延喜の御時、同じ御屏風に駒迎こまむかへの所に、

逢坂あふさかの関の清水に影見えて今やひくらん望月の駒

と詠ず。この難ありや、如何」。時文、口をとづ。しかも時文は貫之が子にて、かくなんそしりける、いよいよ浅かりけり。

『古今著聞集』による

問一 二重傍線部「なり」の働きについて、本歌に即して具体的に説明せよ。

問二 時文の兼盛歌に対する論難の要点を述べよ。

問三 時文に対する兼盛の反論の要点を述べよ。

（二）樋口一葉の文学について、知るところを述べよ。

## 第二問（日本語学領域）

「現代仮名遣い」（昭和六十一年七月一日内閣告示）では、オ列の長音の表記は「オ列の仮名に『う』を添える」こととされているが、同時に、次に例示するような語については「オ列の仮名に『お』を添えて書く」こととされている。

おおかみ、おおせ（仰）、おおやけ（公）、こおり（氷）、こおろぎ、ほお（頬）、ほおずき、  
ほのお（炎）、とお（十）、いきどおる（憤）、おおう（覆）、こおる（凍）、しおおせる、とおる（通）、  
とどこおる（滞）、もよおす（催）、いとおしい、おおい（多）、おおきい（大）、とおい（遠）、  
おおむね、おおよそ

（一）オ列の長音を「お」で表記する語にはどのような特徴があるか、述べよ。

（二）現代仮名遣いでのオ列長音の表記のあり方は、日本語の歴史に生じた変化とかわりがある。どのような変化か、「あふぎ↓おうぎ（扇）」「こほり↓こおり（氷）」の二語を例として、知るところを述べよ。

### 第三問（中国文学領域）

次に掲げるのは、『礼記』の一節である。この文章を読んで、後の問に答えよ。

子曰、<sup>①</sup>好<sub>レ</sub>学<sub>二</sub>近<sub>二</sub>乎知<sub>一</sub>、力行<sub>二</sub>近<sub>二</sub>乎仁<sub>一</sub>、知<sub>レ</sub>恥<sub>二</sub>近<sub>二</sub>乎勇<sub>一</sub>。知<sub>二</sub>斯三者<sub>一</sub>、則知<sub>三</sub>所<sub>一</sub>以脩<sub>レ</sub>身。知<sub>三</sub>所<sub>一</sub>以脩<sub>レ</sub>身、則知<sub>三</sub>所<sub>一</sub>以治<sub>レ</sub>人。<sup>②</sup>知<sub>三</sub>所<sub>一</sub>以治<sub>レ</sub>人、則知<sub>四</sub>所<sub>一</sub>以治<sub>二</sub>天下国家<sub>一</sub>矣。凡為<sub>二</sub>天下国家<sub>一</sub>有<sub>二</sub>九經<sub>一</sub>、<sup>③</sup>曰、脩<sub>レ</sub>身也、尊<sub>レ</sub>賢也、親<sub>レ</sub>親也、敬<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>也、体<sub>二</sub>群臣<sub>一</sub>也、子<sub>二</sub>庶民<sub>一</sub>也、来<sub>二</sub>百工<sub>一</sub>也、柔<sub>二</sub>遠人<sub>一</sub>也、懷<sub>二</sub>諸侯<sub>一</sub>也。脩<sub>レ</sub>身則道立、尊<sub>レ</sub>賢則不<sub>レ</sub>惑、親<sub>レ</sub>親則諸父昆弟不<sub>レ</sub>怨、敬<sub>二</sub>大臣<sub>一</sub>則不<sub>レ</sub>眩、体<sub>二</sub>群臣<sub>一</sub>則士之報礼重、子<sub>二</sub>庶民<sub>一</sub>則百姓勸、来<sub>二</sub>百工<sub>一</sub>則財用足、柔<sub>二</sub>遠人<sub>一</sub>則四方歸<sub>レ</sub>之、懷<sub>二</sub>諸侯<sub>一</sub>則天下畏<sub>レ</sub>之。

問一 傍線部分（１）「好学近乎知」を現代語訳せよ。

問二 傍線部分（２）「知所以治人、則知所以治天下国家矣」を書き下せ。

問三 傍線部分（３）「九經」について、ここではどういふものを指しているか、本文に基づいて説明せよ。